皆の広場

素人の歴史考⑨「但馬・丹波・丹後の古代史」

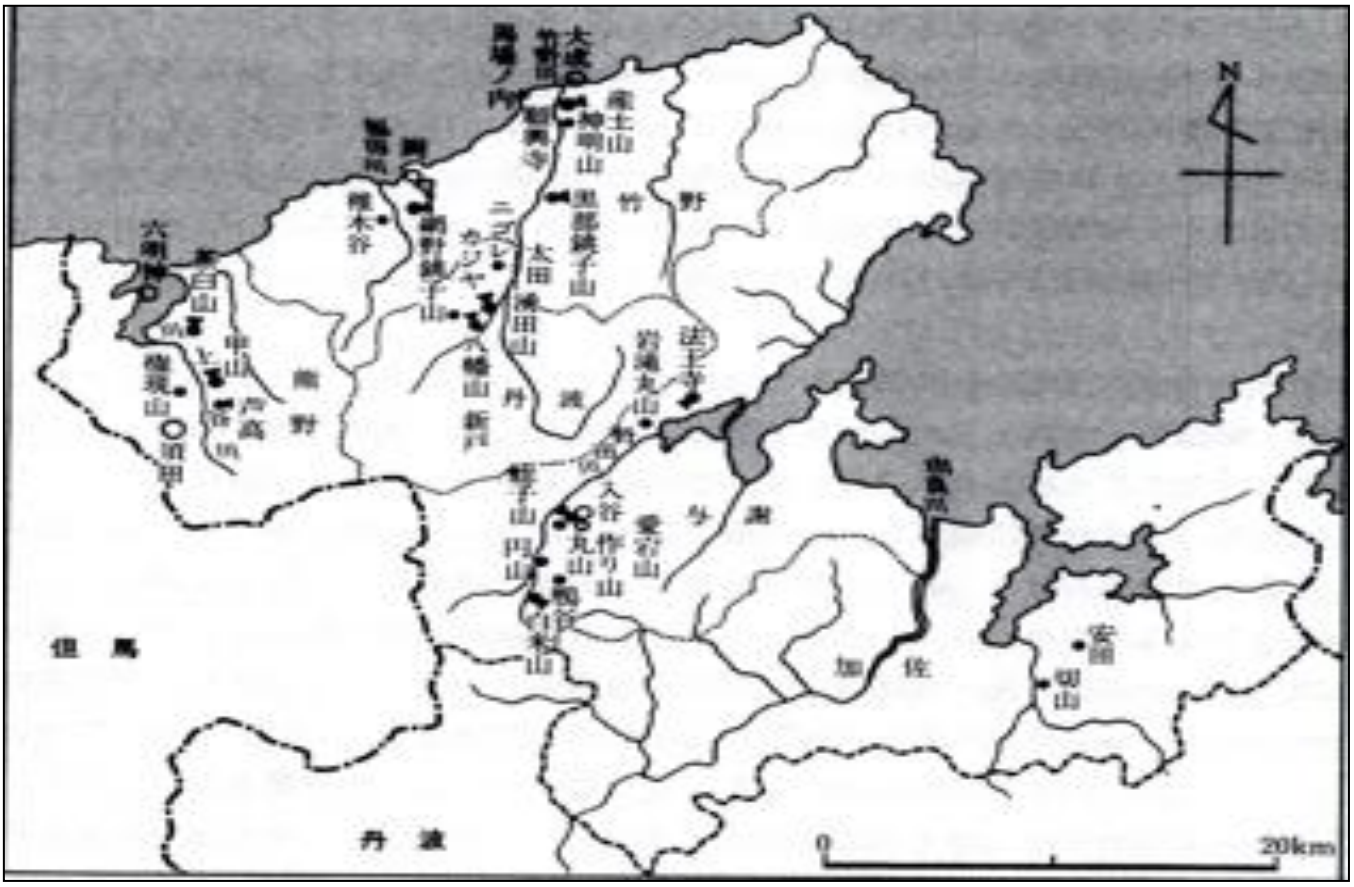
自分科　永野　徹

H21.7.16

（１）はじめに

１）但馬・丹波・丹後の地図

○丹後王国と河川



２）丹波・丹後・但馬の古代概要

１．主な出来事

713年　丹後は丹波から分かれて誕生した。
丹後王国の丹波道主王(ﾀﾝﾊﾞﾐﾁﾇｼ)と**但馬王国アメノヒボコ**の両者
が古代豪族として有名である。
・BC88年：四道将軍の**丹波道主王**(ﾀﾝﾊﾞﾐﾁﾇｼ)の丹波王国伝承がある。
・BC27年：**アメノヒボコ伝承**も無視できない。(朝鮮文化・古墳文化)
ヒボコ伝承は豊岡、城崎に限定しており、南但馬では平安時代に日下部氏
が郡司に成長して中世以降に八木、太田垣、朝倉、田公等の豪族に伸張し
羽柴秀吉の全国制覇で滅ぼされる。
・後述の粟鹿大明神紀の系図の通り、丹後は出雲とも関係がある。
・記紀に見られるように大和・伊勢との関係は深い(大和朝廷の葛城氏)
・元伊勢信仰の地

２．方形台状墓(弥生時代)

弥生時代の方形台状墓は丹波が起源
・峰山ｶｼﾞﾔ遺跡・・弥生中期の方形台状墓
・峰山七尾遺跡・・やよい前期の方形台状墓
・丹後町大山墳墓群・・弥生後期の方形台状墓

３．古墳文化(古墳時代)

丹波王国（4世紀から5世紀）の巨大古墳時代
(竹野川）神明山古墳、黒部銚子山古墳、網野銚子山古墳
(野田川）蛭子山古墳
(川上谷川 茶臼山古墳

３）渡来人の痕跡

１．但馬の古墳

（八幡山古墳群）
村岡町福岡にある古墳群で、竪穴系横口式石室という特異な石室構造
を持ち奥壁の上部から天井部にかけての隅の石組みが特殊で「隅三角
持送式天井」と呼ばれる。これは朝鮮半島に起源を求められるのでは。
（長者ヶ平古墳群）
村岡町大糠にある古墳群で2号墳は巨大な横穴式石室に小型の陶棺
を埋納しており古墳時代末期の方墳である。ちなみに1号は径30M程度
の繋がりが良く解らない。円墳である。この当時畿内では敏達陵古墳は
前方後円墳であるが、後続する推古陵古墳は方形である。蘇我氏の
石舞台古墳も方墳であり、7世紀の主要な古墳は方墳や特殊な形である。
2号墳は「蓮華紋絵画」の石片でも有名で朝鮮半島高句麗の真坡理
古墳の壁画に類似している。
(三の谷古墳群）
村岡町三の谷古墳群では鋭い鉄製利器で描いた石室の壁面の線刻画
が見られる。同じような絵は鳥取県下の古墳でも見られる。
(大藪古墳群等）
養父町の大藪古墳群、八鹿町、和田山の古墳には外護列石があり、
石室プランとして方形、Ｔ字型のものが多く、播磨風土記等から渡来系
集団に多い様式である。

２．但馬の豪族

文献等資料

但馬の渡来人痕跡の文献としては「但馬故事記」、「倭名類聚抄」があり
他には地下から発見される木簡や墨書土器などが上げられる。
但し、古代の氏族名については、757年考謙天皇時の「改賜姓制度」で
氏族の系統に混乱を生じている。
但馬に関係する渡来系氏族として新羅系の秦氏、百済系の漢氏がある。
漢氏の場合特殊な技能系集団として職種に因んだ名前（鍛冶・鞍作・
金作・錦部・桑原・檜前・忍海等）を持っている。

秦氏

秦氏の出地については新羅・加羅が有力でﾋﾎﾞｺと関係する地域には
秦氏の痕跡があると播磨風土記から推定され播磨西部諸郡を占めた
出石町袴狭の薬師堂の薬師如来像の胎内に治承3年(1179)と年号が
記され、その内容から但馬の渡来人関係資料として注目された。
五十有人の人名の中に四名の秦姓を持つ人物が入っていた。
秦氏関係の氏族で別姓の赤染氏がおり、「東大寺奴婢帳」に但馬の
朝来郡桑市郷戸「赤染部大野」が登場する。奴婢である田吉女を東大
寺建立と大仏開眼のために但馬国に稲千束で売ったとの記録がある。
但馬国分寺の発掘調査でも木簡(770年以前)から赤染部得麻呂が
記載されており、但馬の秦氏の渡来人集団の来住が8世紀以前と推定
袴狭遺跡からは「秦」字に入った墨書土器と木簡が見つかっている。
737年但馬国衙正税帳には忍海部広庭と言う人名が記載されており
気多郡思殖郷波太里木簡との関係で秦氏集団の可能性が高い。
秦氏は神祇信仰に厚く出石神社周辺の袴狭遺跡群から大量の木製
祭祀具(人形・馬形・剣形等)が出土したことからも但馬と関係深い

地名

円山川と出石川が合流する付近一帯の地名が加陽と書いてカヤと呼
び朝鮮半島南部の伽耶に起因する地名であろう。古代律令制下では
「賀夜郷（カヤ)」であった。

木簡

藤原京の発掘で出てきた租税の木簡に但馬国「二方評波多里」と記載
が見られる。つまり波多＝秦氏の里と読める。
平城京の租税送り状の木簡では「二方郡波太郷」と記されている。
長屋王家木簡には「但馬国気多郡思殖郷波太里」とあり忍海部麻呂
なる人物が白米五斗を送っており地名は秦氏で渡来系忍海部であろう
半太・判太・波多・波太・波大等は秦氏に通じる。

忍海部氏

737年の但馬国正税帳に忍海部広庭なる人名が見られる。
忍海部の氏族は履中天皇の皇女「忍海部女王」の名代の部または
忍海漢人・忍海手人と言った東漢氏(ヤマトノアヤ)系の渡来人で葛城氏
と関係する氏族であろう。
隣国播磨では8世紀前半に「忍海漢人」が確認されている。

葛井氏

(藤井氏) 但馬における渡来氏族として百済系の西(河内）漢氏の一派で葛井氏
が気多郡に存在する。
袴狭の薬師如来胎内銘にも藤井という人名がある。
葛井氏の前身は白猪史(シライノフフィト)で畿内政権のミヤケ（屯倉・三宅）
成立に深く関わった一族である。各地のミヤケ設置にあたり現地に派遣
され、田部の編戸、定籍を行う氏族であった。
但馬では、アメノヒボコの子孫であるタジマモリを祭る出石郡穴見郷（三宅
地区）にミヤケが設置された

３．雄略紀(5世紀末）

・丹波に土師の私民部を置いた
・丹波浦掛け水門で蝦夷討伐

浦嶋伝承 ・丹波国余謝の浦嶋子伝承
(雄略紀) ヒボコ一族と直接関係はないが丹後半島には浦嶋伝承がある。
「雄略紀」のなかに与謝郡筒川に住んでいた浦嶋子が船釣で大亀を
捕えたところ女性に変身したので妻にして共に海中に入り蓬莱山に
至って仙人と会う。伊根町筒川の宇良神社に彼が祭られており
丹後地方には多くの浦島伝承がある。

ｲｽﾞｼｵﾄﾒ伝承

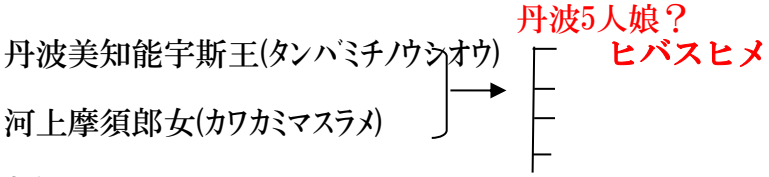
(古事記） 兄弟神が伊豆志哀登買神(ｲｽﾞｼｵﾄﾒ)を結婚相手に賭けをして弟神が勝った時に
兄神が「上下の衣服を避り、身の高さを量りて甕酒を醸み亦山河の物悉に備え
設けて宇禮豆玖を為む」と言う賭け事の始まりを意味する神話で兄神は賭けで
弟神に負けたが約束のご馳走をしなかった為、母神から罰を受けたの教訓説話。

（２）丹波・丹後の古代史

１）古事記の記事

・開化天皇の頃に丹波の大県主「**由碁理**(ユゴリ)」がいたと伝承。
・崇神天皇の頃「日子坐王」が玖賀耳御笠を殺した、
・BC88？崇神天皇の頃、四道将軍記事として、**丹波道主命**(タンバミチヌシ)を派遣した。
・BC15？垂仁15**丹波の豪族5人娘**が垂仁天皇の五后となった？

丹波五娘（開化紀、垂仁紀で異なる記載）

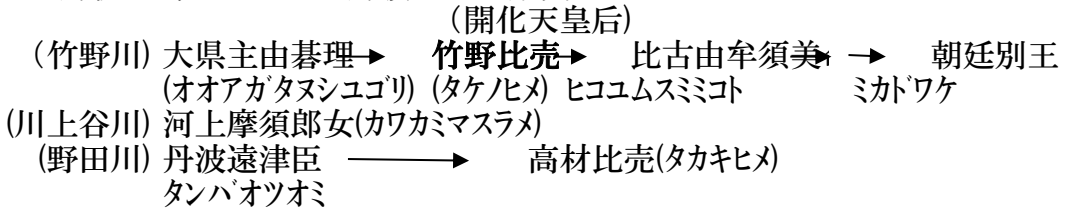


２）日本書紀の記事

・崇神・垂仁紀：大和朝廷が出雲討伐のとの関係で丹後を経由
BC22？物部氏の同族・武諸隅(タケモロスミ）に出雲大神宮の神宝の献上を命じた所
内紛が生じて出雲フルネが反発したので吉備津彦・武淳川別（タケヌナカワ)が侵攻して
フルネを討伐し、出雲神を祀らなくなり、丹波氷上の氷香戸辺が出雲大社の託宣を
皇太子に奏上して再び祀るようになった。
・AD49年垂仁紀に石上神社の神宝を物部十千根に祀らせとあり、内、一つが
丹波国桑田村出の八尺蝮勾玉(ヤサカニマガタマ)であるという。
・雄略～安閑紀：出雲は関係なく丹波独自の記事となる。
478年雄略紀丹波国余謝の浦嶋子伝説
479年丹波国浦掛の水門で逃亡した蝦夷を討伐した。

３）丹波道主王の系図

（丹後半島の３河川と丹波道主の系図）



・丹波豪族・由碁理（ユゴリ)の名前の由来は金属を鋳造する時の湯の濁りか、玉造の
湯とか水に由来するのではないか

(日本書紀系図）
・開化天皇と皇后伊香色謎命(イカガシコメノミコト)との間に崇峻天皇が生まれ、この天皇
と御間城姫(ミマキヒメ)との間に垂仁天皇
・開化天皇と丹波**竹野媛**との間に彦湯産隅命（ヒコユムスミノミコト)があり、その子が**丹波
道主命**(タンバミチヌシノミコト)と言う説もあるが書記では**父は彦坐王**(ヒコマス)としている。
彦坐王の母・姥津媛（ハハツヒメ)は奈良県北部の豪族の首長である**和邇氏の出**
丹波**竹野媛**が古代文献に表れる丹後の最初の人物である。
・BC88年：**丹波道主王**は崇峻天皇が派遣した四道将軍の1人で丹後豪族を任命？。

(古事記）
・開化天皇と后の**竹野比売**とあり「丹波大県主**由碁理の娘**」と父の名がある。
・皇子は「比古由牟須美命(ヒコミムスミミコト)だがその子は丹波道主王ではなくて
彦坐王となっているが神格で実在人物とは言えない。

４）古代但馬の系図

719(丹波）「籠(コノ)神社」の**海部氏系図**・・平安時代初期作
708(但馬)「**粟鹿大明神**元記」
その他に「但馬国司文書」もある。

海部系図 火明命(ホノアカリ)　‥倭宿禰命(ヤマトスクネ健振熊宿 ・・**海部直**(アマベアタイ)
(719年)　　(15代)
・丹後「籠(コノ)神社」の**海部氏**(アマベ)**系図**。（平安時代初期)、火明命から15代まで
・15代で初めて丹波と関係する海部直(アマベアタイ)が登場する。
・海部氏のはじまりは**火明命**(ホノアカリノミコト)となっている。
・海部系図では記紀で言うニニギノ命の天孫降臨とは別系統の降臨説話となる。

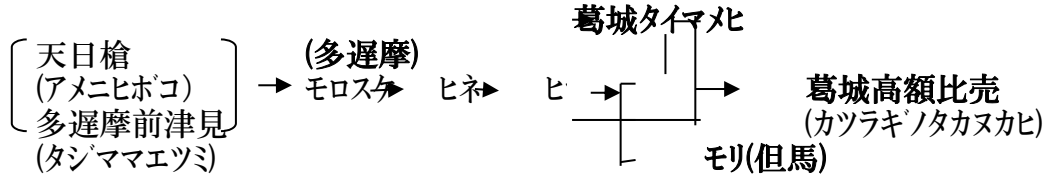
(母：丹波道主王の娘)
粟鹿系図 スサノオ(初)・・オミツヌ(4)‥オオクニヌシ(6)‥**ウマシモロネ**(13但馬)‥トヨミケ主(14伊勢)‥
(708年)　…大田タネコ(16)
…オオタヒコ神(17粟鹿村)…　　神部直根閉（30代カンベアタイネトシ）

・17代で初めて但馬国朝来郡の粟鹿村が登場。それ以前の出雲系は作為あり。
・但馬では出石神社が一の宮になるまでは粟鹿神社が一の宮であった。
・708年（和銅元）に作られた。初代から30代までの粟鹿大明神の系図
・この粟鹿系図からは、丹波粟鹿大明神家は出雲系である。
・今の丹後には**元伊勢信仰**が強い(伊勢外宮の神様は丹波の出)
・**13代宇摩志毛呂尼命**(ウマシモロネノミコト)の母は丹波道主王の娘であり、但馬粟鹿大明神の祖先は**丹波道主王**(タンバミチヌシ)**の外孫**にあたる。（紀元0年前後？)
・14代刀余美気主命(トヨミケヌシノミコト)の母は**伊勢**播主の娘で伊勢外宮の神は丹波の出**元伊勢信仰**の神社が丹後に2つある。
・16代、ヤマト大神(オオミワ)朝臣・大田田根子は出雲系である。
・17代オオタヒコ神が初めて但馬の朝来郡の粟鹿村に来た。

（３）但馬の古代史
１）但馬の古代史概要
１．総括
垂仁天皇(BC27年？)にアメノヒボコ渡来。
アメノヒボコは新羅から穴門に着き、播磨～近江～若狭を経て**但馬でマエツミ**と結婚。
記紀では、マエツミは但馬マタオの娘説とマタオの母説の書伝がある。
その後葛城氏と婚姻して、ヤマト朝廷の神宮皇后ー応神天皇への系図が見れる。
麻多尾(マタオ)と結婚し、但馬諸助(モロスケ)ー但馬日楢杵(ヒナラギ)ー**清彦**(キヨヒコ)
ー**田道間守**（タジマモリ)ー葛城高額比売ー神宮皇后ー応神天皇と繋ながる。

２．古事記

・ヒボコ一族は神宝事件で**清彦**が活躍したが、天皇家と重要な役割を果したのは**タジマモリ**であった。
・多遅摩モリは天皇の屯倉を授かり「三宅連(ミヤケムラジ）の祖」と言われる。
663年に連の姓を得た三宅連は難波を本拠として海上交通に従事した氏族である。
三宅連の前は「吉士（きし）」であって、新羅の冠位１７階の１４番目であった。
・垂仁90年（AD61）常世国に田道間守を派遣
・垂仁天皇の時、命を受けて苦労して常世国に行き長寿薬「トキジクノカクノコノミ」（橘）を持ち帰ったが既に天皇は崩御されていた。これにより橘守≒但馬守は同族となった
・タジマモリは大伴家持の歌で日本に橘を伝えた人物として褒め称えられている。
・允恭天皇の皇女「橘大郎女(オオイラツメ)」は「但馬橘大娘皇女」と同一人物であろう。



・但馬は奈良の葛城氏との繋がりでヤマト朝廷と深い関係がある。
・アメノヒボコはマエツミトと結婚して3人の子（モロスケ～ヒネ～ヒナラギ）を設け、ヒナラギの3人の子のうちキヨヒコが葛城タイマメヒと結婚して葛城と繋がる。

３．但馬と葛城氏

(葛城氏との繋がり）
開化天皇の后の1人に葛城ワシヒメがいて、父は「葛城垂水宿禰」で子供は
建豊波豆羅和気（ﾀｹﾄﾖﾊｽﾞﾗﾜｹ）が居り、子の血縁関係氏族を見ると。
大和朝廷とつながり深く、近畿以外にも勢力の繋がりのある中心として但馬が見える。
・大和葛城に葛城忍海部造（ｶﾂﾗｷﾞｵｼｳﾐﾍﾞﾉﾐﾔﾂｺ)
・明石垂水と関係する父の葛城垂水宿禰
・北陸ｺｼの道守臣の一族。
・因幡の忍海部
・丹波竹野川の流域の竹野別(ﾀｹﾉﾜｹ)
・大阪堺の依網阿毘子(ﾖﾘｽﾞﾅｱﾋﾞｺ)
・但馬の多遅摩守は屯倉：三宅連の祖とされる

４．ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺ伝承

但馬語部
・ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺの末裔を名乗る氏族系統が応神の母系系譜に繋がっていると言う
日本書紀の記事は古くは帝紀等で語られ、その渡来伝承や後裔達の物語は
旧辞に属するものである。これは皇位継承や大嘗祭などの大切な行事の中で
七カ国の語部達（美嚢８、丹波２、但馬７、因幡２、出雲４、淡路２）奏上された。
・但馬語部の奏上は、記紀において多くの伝承が採用されたことについては、天皇
即位と言う大切な儀礼で重視されている天皇の鎮魂祭の呪具がｱﾒﾉﾋﾎﾞｺが将来
した神宝とほぼ共通する事が関係したのかも知れない。

５。神社

出石神社関係
古語拾遺以降ヒボコの名は中央の資料から消えて、927年に完成する「延喜式
神名帳」には出石神社が「伊豆志座神社八座」として出てくる。八座とはﾋﾎﾞｺが
新羅から将来した「八種の神宝」を指す。延喜式臨時祭式の名神祭でも同じで、
但馬では八社がこの臨時祭を執り行っている。
１０世紀前半まで出石神社に祭られていたのは「八座の名神」であったが時代が
下ると依代である神宝に神がおりると変って行った。
神宮寺の成立
出石神社も神仏習合の信仰が深まると神宮寺が付随するようになった。出石
神社の場合、神宮寺は涅槃寺が中世以降に総持寺と名を変えて一宮神宮寺
の役割を荷う事になったようである。
気多の総社
一宮が成立したころ、国守の最初の仕事は国衙での政事始と国内神社への参拝
だり、これを終えるとあとは代官に任せて京の屋敷に帰ってしまう。そのため国内
主要神社への参拝は時間が掛かりすぎるのでこれ等神霊を国衙に近い1箇所に
集めて総社とした。一宮は「国第一の鎮守」の霊力を有する神社として国守に尊崇
された。
神社縁起
平安時代末期に神社縁起が作成されるようになったので、出石神社縁起も作成
されたはずが、1504年山名攻めの巻き添えを喰って戦火で消失したようである
神社再建
1524年総持寺の中興開山僧は光盛で、1535年に出石大明神の本地仏である
十一面観音像の開眼供養が行われた。この時の勧進沙門状にはﾋﾎﾞｺの名はない。
沙門状の国土創生物語には出石大明神が行った「瀬戸の開鑿」に触れている
ﾋﾎﾞｺ像はこれ以降出石でなく、城崎温泉へと移る。
温泉寺縁起と曼荼羅
城崎温泉寺縁起に708年に温泉寺開基道智上人が夢の中で出石大明神の眷属
が現れて、曼荼羅を埋めた場所を掘った所お湯が湧出て曼荼羅湯となったと伝承
1597年、曼荼羅湯に湯治に来ていた僧が曼荼羅記異本の由来について「日生
下者新羅天日槍太子之後也」と書かれており、「和銅元年明神惣降日我是天日槍」
（和銅元年に神が日より降り、自分はｱﾒﾉﾋﾎﾞｺであると名乗った）と書かれていた。
曼荼羅縁起には「この地は靺鞨韓国と一葦相接する処にて今に於いても韓人漂着
することあり」と書かれていて、豊岡市気比や城崎町湯島には外来神への信仰が
定着し易い場所であったと推定される。

２）但馬の神社

１・出石神社

（本殿）
現在の出石神社本殿は大正3年の再建で、三間社流れ造り、千木、鰹木を備え
南面し、その前に幣殿と祝詞殿（切妻）がある。拝殿は舞殿形式で入り母屋造り
平入りで正面に身舎の屋根と平唐破風の向拝を有する。
（縁起）
延喜式神名帳、一の宮縁起で丹波道主命（四道将軍の1人）と多遅麻比那良岐命
（天日槍の孫）の両神が朝廷に奏問して、天日槍の将来した八座の神宝を伊豆志
八前大神として祭祀したとのこと。
諸杉神社ヒボコの長子、但馬諸助を祭る。

２．御出石神社

主神は出石乙女（伊豆志袁登売神）は美しい娘で八十神が得んとすれども得ず
式内社で下賀茂神社租神を併祭しており賀茂さんと呼ばれている。
中嶋神社（豊岡市三宅）
祭神は田道間守(タジマモリ)、全国唯一のお菓子（果物）の神様
タジマモリは垂仁天皇の命令で、丸山川一帯の但馬水軍を率いて不老不死の木の実を
求めて常世国へ出帆し、苦労して入手して「非時香果トキジクノカKグノコノミ（橘）」を献上
但馬に２つ三宅（豊岡市三宅、関宮町三宅）があり、、同じく橘守がありこれが訛って
タジマモリとなったと言う。また橘守の事を三宅（屯倉）連アメノヒボコとも称する。
多遅麻毛理は三宅連(ムラジ)の祖で新羅国王子天日槍命の後裔と言われる。

３．韓国神社（物部氏：播磨命）

丹後円山川の城崎と反対側に入ったところにある韓国神社の伝承として
韓国神社の祭神は外来神ではなく武烈天皇（500年頃）の勅命の任務を帯びて
物部真鳥命が韓国に使いし、帰途に多遅麻国三島の水戸に上陸した。その後天皇
が使命を輻輳して物部韓国連と呼び、その子渚鳥命は欽明天皇(540年頃）の御代
城崎郡司となり、大いに土工を起こし墾谷(ハリタニ)を開墾し、その名を「播磨命」と
改名して墾谷と言い、飯谷地名の起源となし、飯谷開拓の租神として鎮祭された。

３）アメノヒボコ（但馬古代史）

１．はじめに

但馬の出石は今日、出石焼き、出石ちりめん、出石そばなどで有名で、古代に
新羅からのｱﾒﾉﾋﾎﾞｺ渡来伝承がある。
アメノヒボコは、「但馬開発の租神」、「新羅国王子」、「出石神社の祭神」
「渡来系氏族の名前」、[太陽神神宝の矛」・・と言われており、日槍は1人の
特定の人物を指すのでなく新羅からの集団渡来人全体を指すと言われている。
それもある時一度に渡来してきた集団でなく長い時間掛かって小集団を言う。
・垂仁3年（BC27)ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺは新羅から渡来し、但馬に定着したとの伝承。
ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺ（天日槍）は新羅の王子で自国は弟に譲り、新羅を出て播磨宍粟郡
に上陸し戦闘の後、　淀川～琵琶湖（近江）～若狭経由で但馬に入国した。
・剣（矛）＝武力を背景に土地の明け渡しを迫る外来神の姿が播磨のヒボコ
イメージにある。
播磨風土記には、土地の神（ｱｼﾜﾗｼｺｵ・伊和大神）とヒボコの戦いが記載され
るなかで、多くの地名の起源説話を残す。
(宍粟郡：粒丘・川音村・奪谷・伊奈加川・波加村・糠丘・・など)
その場所で、ご飯を食べながら、口から米粒をこぼすすと丘が粒丘（イボの
ような）になった事から、この地を竜野市揖保町と命名された。
古事記、日本書紀のアメノヒボコの物語は渡来系氏族の租神伝承を8世紀初
に記録として残したもの。
ﾋﾎﾞｺの原典は6世紀初の継体・欽明天皇の頃に「旧辞」、「帝紀」で文書化さ
れていたと推測される。

2．ﾋﾎﾞｺ物語（ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺﾉのあらすじ）

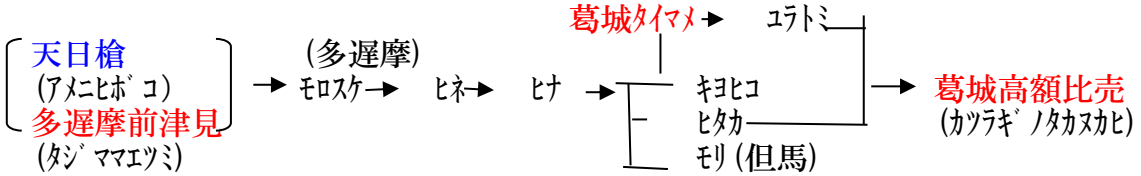
・新羅に鉄製の矛(槍)を神のﾖﾘｼﾛ（依代）とする民族が居てその首長はｱﾒﾉﾋﾎﾞｺ。
・日本に渡った先人達が筑紫・出雲・大和等に独立国家を建て活躍していると聞く。
・新羅国は周辺国家を併合して拡大しつつあり、ﾋﾎﾞｺの故国安羅も新羅に併合したところで、できれば日本で「ﾋﾎﾞｺ王国」を建設したいと考えていた。
・そうした最中に、新羅の首都からスサノオが日本島に渡った事を聞きﾋﾎﾞｺも決断。
・ﾋﾎﾞｺは日本渡航の大集団の編成に取り掛かる。（船団長キシ氏、隊長ハタ氏等）
・ﾋﾎﾞｺ船団は九州筑紫に駐屯してから、瀬戸内海コースと日本海コースに分れた。
・ﾋﾎﾞｺは播磨に上陸して出雲・伊和群に敗れて、河内に上陸する時ヤマト王国の女奴隷となっていたアカル姫を救った。
・アカル姫はヤマト王国の初代王ズンムに討たれた河内の王ナガスネの子孫。
・ﾋﾎﾞｺは淀川から宇治川を遡り、琵琶湖にはいりアナ邑に上陸した。
・しかしヤマト王国の圧力が強く、若狭から但馬へ下った。
・ﾋﾎﾞｺは但馬の出石に最初の根拠地を置いた。
・ﾋﾎﾞｺの技術集団は冶金・鍛冶・土木・建築・彫刻・農耕・土器・航海・農業・養蚕医師・祭祀等多岐に渡っていた。
・ﾋﾎﾞｺは養父郡の豪族但馬族の長マタオの娘マエツミの婿となった。
・ﾋﾎﾞｺの但馬開発は丸山川河口の平野耕作と死野（生野）鉱山開発から着手した。
・ﾋﾎﾞｺ王国はやがてヤマト王国、出雲王国等を脅かす勢力に成長した。
・ﾋﾎﾞｺは第2夫人としてナガスネのアカル姫を迎えて但馬国を建国し初代王となる。
・ﾋﾎﾞｺは北九州・中国・淡路近江・越前の国々とヤマトへ宗教とﾋﾎﾞｺ族を配属した。
・但馬と出雲は和睦してヤマトと泉水国「大鳥浜」で同盟することになり出発。
・ﾋﾎﾞｺと従者200余人は大鳥浜で皆殺しにされた。
・但馬王国は二代目はモロスケが、三代目はスガヒコが継いだ。
・スガヒコの時ヤマト朝廷から但馬王国の神宝を献上させられた。
・ヤマト王国はやがて但馬王国から取上げた玉・剣・鏡を「三種の神器」とした。

3．ﾋﾎﾞｺ伝承（天日矛命）

天日矛命は新羅の王子で自国を弟知己に譲り、垂仁天皇3年に播磨の国宍粟邑に渡来して、その後　難波～宇治川～近江（吾名邑）～若狭から海路で但馬国へ
ヒボコは伊和氏らの抵抗に会い播磨を諦めて、近江へ逃れたが近江(安羅邑）でもヤマトの勢力に追われて結局雪国の但馬へ追い込まれたのではないか。
「近江国の陶人は天日槍命の従人なり」（安羅邑）と日本書紀には記載されている
ｱﾅはﾋﾎﾞｺが一時住んでいた吾名邑に通じ、750年但馬から東大寺へ貢進奴の主人である大生部(ｵｵﾐﾌﾞ)直山方と土師部の住んでいた出石郡穴見郷の穴と通じる。
安羅邑（ｱﾗ)はｱﾔ（漢）邑とも呼ばれて坂上氏一族かもしれない。坂上田村麻呂の働きで奈良の高市郡に高市連に替わって８世紀には漢氏の同族が任命され、坂上皇居警備の長官である大忌寸(ｵｵﾐｷ)苅田麻呂の時宿禰の姓を宛てられた一族か。
ヒボコのさすらいの要因としてヤマト王家の圧力と出雲勢力の圧迫が大きいのでは。
但馬国は地殻変動で丸山川河口付近が隆起して泥水が充満して泥海で不毛の地であったので、河口岩石の開削工事を行い但馬平野と耕地の基礎を築いた。
工事に際して鉄器具は丹波の「鉄鈷(ｶﾅﾄｺ)山」の砂鉄を採取して麓の但東町で工具を鍛造したと思われ、新羅から多くの技術集団を引き連れ渡来していたと推測される。鉱山師のヒボコにとって、但馬・出石の山々、生野連山が鉱山である事が土着の理由の１つかも知れない。
出雲の大穴持命も名前からして、大穴を持っている神、即ち間歩を沢山持つ神とすると鉱山師となり、背中の大きな袋は鉄精錬（タタラ）道具が入っていると想像さられる。

4．ヒボコ系図

・垂仁3年（BC27)天日槍、但馬国に渡来
アメノヒボコは新羅から穴門に着き、播磨～近江～若狭を経て但馬でﾏｴﾂﾐと結婚。
記紀では、マエツミは但馬マタオの娘説とマタオの母説の書伝がある。



・但馬は奈良の葛城氏との繋がりでヤマト朝廷と深い関係がある。
・ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺはマエツミトと結婚して3人の子（ﾓﾛｽｹ～ﾋﾈ～ﾋﾅﾗｷﾞ）を設け、ﾋﾅﾗｷﾞの3人の子のうちキヨヒコが葛城ﾀｲﾏﾒﾋと結婚して葛城と繋がる。

(日本書紀)
「応神記のヒボコ伝承」

５．渡来伝承

新羅の阿具沼の畔で昼寝していた女が、日光の光線で身ごもり赤い玉を生んだ
これを見ていた男がその赤玉を貰い受け、ある日牛に荷物載せて田んぼへ出かけ
たところ、アメノヒボコに会い牛泥棒と間違えて捕えられたので例の珍しい赤玉を
渡して退散した。
ヒボコが赤玉を家に持ち帰ると、突然美しい乙女に変化したので后とした。その後
姫（阿加流比売）は難波の比売碁曾神社へ帰ってしまった。そこでヒボコは姫を
追い日本に渡ったが「渡りの神」が難波行きを妨害したので但馬に到った。
この地で、多遅摩之俣尾の娘（前津身）と結婚して神宮皇后（息長帯比買）の母
葛城高額比売が生まれた。
ヒボコは新羅から持ってきた八種の宝を伊豆志之八前大神として祀ったと言う。
ﾋﾎﾞｺ伝承には大陸の民間伝承に源流が繋がる4つの特徴がある。
①日光により身ごもる話は日光感精型と呼び蒙古や満州族に伝わる。
②玉子から人が生まれるのは「卵生型」と呼び新羅・加羅王誕生も同じ
③先に日本に去った方が太陽の化身で海の果てを太陽の故郷と考える
のは「海洋型」と呼びユーラシア大陸南岸一体に分布する。
④ﾋﾎﾞｺが渡りの神に妨害される話は交通の要所に荒ぶる神がいて外者
の浸入を妨害する説話は「播磨風土記」に良くある。

ﾋﾎﾞｺと但馬家系図

・日本書紀には近江国鏡村の須恵器工人はﾋﾎﾞｺの従者であると記載
高熱を処理する技術としては但馬の鉄生産・加工とも繋がる。
・「紀」によれば、各地遍歴のあと但馬に入り、出嶋(ｲｽﾞｼ)の有力者の太耳の娘
麻多尾(ﾏﾀｵ)と結婚し、但馬諸助(ﾓﾛｽｹ)ー但馬日楢杵(ﾋﾅﾗｷﾞ)ー**清彦**(ｷﾖﾋｺ)
ー**田道間守**（ﾀｼﾞﾏﾓﾘ)ー葛城高額比売ー神宮皇后ー応神天皇と繋がる。

（古事記）・ﾋﾎﾞｺ一族は**神宝事件で清彦が活躍**したが、天皇家と重要な役割を果した
のはタジマモリであった。

ﾀｼﾞﾏﾓﾘ ・垂仁90年（AD61）常世国に田道間守を派遣
・垂仁天皇の時、命を受けて苦労して常世国に行き長寿薬「ﾄｷｼﾞｸﾉｶｸﾉｺﾊﾐ」（橘）
を持ち帰ったが既に天皇は崩御されていた。

記紀系図 ・古事記ではヒボコの系図は神宮皇后を経て応神天皇まで繋がっているが、
日本書紀ではタジマモリで意図的に終わっている。　新羅を征伐した
神宮皇后の先祖が新羅人ではまずいから。

垂仁一書 ・妻は太耳の娘（麻多烏）、長男(但馬諸助)、孫（但馬日楢杵ﾋﾅﾗｷﾞ）

（ヒボコの神宝）

神宝献上

天皇が日槍の持ってきた宝物を見たいと使者をﾋﾎﾞｺの曾孫・清彦に派遣。
清彦は宝物を献上したが、出石小刀だけは衣の内に隠していたのが露見。
ところが、後日蓋を開けたところ小刀は消え失せていたので清彦に問うと。
「昨夜、小刀は自然に家に帰ってきたが、今朝はまた消え失せた」と答えた。
天皇は恐れを抱いてそれ以上捜さなかったが後に小刀が淡路島に現れた。
島人は祠を建ててこれを祭った。

(垂仁紀)

一書　BC27年、垂仁天皇の時代に七種の神宝を持ってアメノヒボコが帰化した。
一書によれば、ヒボコは船で瀬戸内を渡って播磨宍粟郡に入り、その後
淀川から琵琶湖に出て若狭から丹波へ入った。

本文　・ヒボコの将来した神宝は羽太の玉、赤石の玉、出石の小刀、出石の鉾
日鏡、熊の神籬(ﾋﾓﾛｷﾞ)の計7品。

一書　一書では大刀を加えて八品とある。
(葉細の珠･足高の珠･鵜鹿鹿の珠･出石の刀子･出石の槍･日鏡･熊の神籬
胸狭浅の大刀の八宝)

(但馬の神社)

出石神社

（本殿）　現在の出石神社本殿は大正3年の再建で、三間社流れ造り、千木、鰹木を備え
南面し、その前に幣殿と祝詞殿（切妻）がある。拝殿は舞殿形式で入り母屋造り

平入りで正面に身舎の屋根と平唐破風の向拝を有する。
（縁起） 延喜式神名帳、一の宮縁起で丹波道主命（四道将軍の1人）と多遅麻比那良岐命（天日槍の孫）の両神が朝廷に奏問して、天日槍の将来した八座の神宝を伊豆志八前大神として祭祀したとのこと。
諸杉神社 ﾋﾎﾞｺの長子、但馬諸助を祭る。
御出石神社
主神は出石乙女（伊豆志袁登売神）は美しい娘で八十神が得んとすれども得ず式内社で下賀茂神社租神を併祭しており賀茂さんと呼ばれている。
中嶋神社（豊岡市三宅）
祭神は田道間守（ﾀｼﾞﾏﾓﾘ）、全国唯一のお菓子（果物）の神様
タジマモリは垂仁天皇の命令で、丸山川一帯の但馬水軍を率いて不老不死の木の実を求めて常世国へ出帆し、苦労して入手して「非時香果ﾄｷｼﾞｸﾉｶｸﾞﾉｺﾉﾐ（橘）」を献上
但馬に２つ三宅（豊岡市三宅、関宮町三宅）があり、、同じく橘守がありこれが訛ってタジマモリとなったと言う。また橘守の事を三宅（屯倉）連ｱﾒﾉﾋﾎﾞｺとも称する。
多遅麻毛理は三宅連（ﾑﾗｼﾞ）の祖で新羅国王子天日槍命の後裔と言われる。

（４）地図

１．（但馬・丹波・丹後）の地図

２．丹後半島地図

日本海
丹後
京丹後市
網野
久美浜
峰山
大宮
宮津市
伊根町
兵庫県
豊岡市
久美浜周辺
間人周辺
コウノトリ但馬空港周辺